

365 日完全放牧 ニュージーランド産 牧草牛



最高の環境と上質な牧草

栄養価の高い牧草とハーブ

ニュージーランドはオーストラリアと比べ小さな国ですから、国全体の気候や環境がほぼ同じ。夏は涼しく、冬も穏やかで、1年を通して温暖な気候、北島の豊富な降雨と、南島の南アルプスからの清らかで豊富な水資源が家畜の餌となる品質の高い牧草を育みます。国土の半分以上が牧草地として利用され、牛たちはストレスの少ない自然放牧で、栄養価の高いマメ科・イネ科の牧草やハーブをミックスした種が蒔かれるので、牛の食欲増進や消化を助長し、恵まれた環境の中でのびのびと育てられています。

上品ながら力強い赤身

アンガスなどヨーロッパ系畜種

ニュージーランドの気候は美味しい牛の原産地として知られるヨーロッパと同じ気候帯ですので、アンガスを筆頭に、シャロレーやヘレフォード、ショートホーンなどヨーロッパ系の肉用種を中心に飼育しています。これらのビーフは、オーストラリアの亜熱帯に適したシンメンタールやブラーマンなどの水牛系の肉用種に比べるとロース芯が太く、強いフレーバーを有し、きめが細かく柔かい肉質で、世界中で高い評価を得ています。もちろん、自然育ちの牧草牛はPS(Prime Steer)規格を素牛として使用しており、素材がいいからシンプルな調理法でおいしさが引き立つと世界のトップシェフから認められています。

高い栄養価とうまみ成分

赤身魚や昆布と同じうまみ

マグロやカツオなどの赤身魚には「うまみ成分」が含まれていますが、実は赤身肉である牧草牛にもこの成分がたっぷり。イノシン酸とグルタミン酸からなるうまみ成分は、食品の赤い部分に含まれていて味に敏感な日本人が好む鰹だしや昆布だしもこの「うまみ」が主成分になっています。本来のえさである牧草を食べている牧草牛には、「良質なタンパク質」や「鉄分」、「オメガ3脂肪酸」など、大切な栄養素が、穀物を与えて肥育する牛よりも多く含まれていながら「低脂肪」「低悪玉コレステロール」でとてもヘルシー、健康志向の消費者に最適な食材です。

牛が牛らしく健やかに育つ

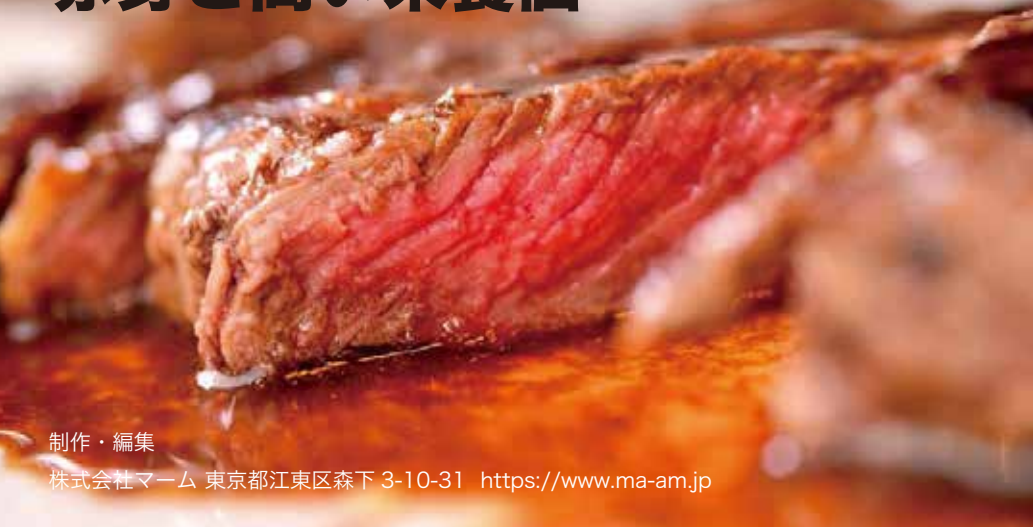
牛は本来、野外で好きな時に好きなだけ
牧草を食べている動物です。

そんな当たり前でありながら

実現が非常に難しい、恵まれた環境の
中でのびのびと育ちます。



イメージを覆す美味な 赤身と高い栄養価



成長促進ホルモン剤は不使用

栄養価の高い牧草が一年中育つ
ニュージーランドで放牧される牛
は健やかに大きく育つため成長促
進ホルモン剤は必要ありません。

抗生物質の残留は無し

牧草は本来、牛にとって最も自然
な食べ物である為、健康を保つた
めの抗生物質の日常的な投与は不
要です。牛舎の過密状態で飼育さ
れる牛とは違い、病気予防のため
に日常的に抗生物質を投与する必
要はありません。治療のため抗生
物質を投与した場合、その牛は識
別する義務があり、抗生物質が残
留していないかを検査するシステ
ムがあります。

BSE や口蹄疫の発生率ゼロ

ニュージーランドでは BSE をは
じめ口蹄疫などの深刻な病気が発
生したことは一度もありません。
その主なる理由としては、他の大
陸と離れていること、第一次産業
省（日本の農林水産省にあたる）
による家畜の健康監視があるこ
と、厳しい検疫システムなどがあ
げられます。

肉骨粉の輸入は国が禁止

牧草だけを食べるため飼料は必要
ありませんが、そもそも、BSE 問
題の数十年前からニュージーラン
ドは国として肉骨粉の輸入を禁止
しております。遺伝子組み換え飼
料も使用していません。

トレーサビリティを義務化

一頭一頭すべて、獣医師や検査官
が家畜の健康状態、加工過程も含
め安全性を確認。2012 年 7 月よ
り、個々の牛に無線 IC タグをつ
けて追跡する電子トレーサビリ
ティーシステムを開始しました。